

作家・桜庭一樹さんとの読書会——『伏 貢作・里見八犬伝』を朗読

3月30日、東京・六本木の国際文化会館で「本好きのための電子書籍のススメ 桜庭一樹さんと電子書籍にチャレンジ！」と題したイベントを開催しました。同イベントは、毎回話題の作家さんに、ご自身の作品を電子書籍専用端末「Reader」を使って朗読してもらうという読書会。7回目の開催となる今回は、ゲームシナリオライターとしての顔も持つ桜庭一樹さんをお招きしました。

読書会の司会進行役を務めるブックディレクターの幅允孝さんと共に、盛大な拍手で迎えられながら桜庭さんが登場。

「本は100人読者がいれば100人分の解釈の仕方があると思います。自分が気づかなかった発見をこの読書会を通して、作者の桜庭さんも交え、皆さんで共有できるような時間になればうれしいです」と幅さんが挨拶し、読書会がスタートしました。



今回、桜庭さんが課題図書として選んだのは、文藝春秋創立90周年記念作品であり、今年秋に劇場用アニメーション映画としても公開が決定している『伏 貢作・里見八犬伝』。同作は江戸時代の名著『南総里見八犬伝』をテーマしながらも、桜庭さん独自の解釈を加え執筆されたものです。

「原作の里見八犬伝は、完全な勧善懲惡の作品。しかし、現代において善と惡の役者がはっきり区別されるようなことはあり得ないと思っています。新しい視点から描く八犬伝としてプロットを書きました」(桜庭さん)

同作を朗読しようと思った理由をお伺いすると、「この作品は歌舞伎を見に行った帰りに生まれたもの。自分が舞台を見ているような感覚になりながら芝居調に書き進めていくように意識したので、これを声に出して読むとどうなるのか面白そうと思って」と桜庭さん。

朗読していただいたのは、作中作「貢作・里見八犬伝」の冒頭で、「伏」という生き物が誕生するシーン。桜庭さんが読み終えると拍手が巻き起こり、参加者からは「頭の中ではべらんめえ口調で物語を読み進めていたので、桜庭さんの静かで落ち着いた朗読を聞くのはとても新鮮だった」という声も聞かれました。

朗読の後は、桜庭さんに同作への思いを語っていただくトークセッションへ。まず話題に挙がったのが、作中に登場する森の民をはじめ、「不思議な生き物や場所のインスピレーションはどこから生まれてくるのか」というものでした。

「執筆している時は、ふるさとの中国山地の山々をイメージして書き進めていました。今でもよく覚えていますが、あの空間にいると文明的な社会から隔離されたような錯覚に陥ります。『この山の中の奥には、見たことのない何かが住んでいて……』と考えると、とても不思議な感覚になるんです」(桜庭さん)



また、桜庭さんはご自身の創作活動の中で、実体験や人から聞いた話など様々なものを組み合わせて執筆されていることを披露。



「作品を書いていく際、これまで長い間考え続けていたことや昔体験したこと、それに最近見聞きした出来事をごちゃまぜにして物語を組み立てています。それがとても楽しい」（桜庭さん）

恒例となった参加者からの Q&A コーナーでは、作中に登場するキャラクターたちの運命がその後どうなっていくのか、ラストシーンは何をイメージして書いたのかという質問などで盛り上りました。

「『伏』は実社会に生きる私たちの弱さやずるさをそなえた生き物。もしかしたら自分がその子孫かもしれない。読者の皆さんには、登場人物の浜路（はまじ）が『伏』を狩るためにそれを追い回し続けたように、時を越えて浜路が自分を狩りにくるのではという感覚を感じてほしい」と桜庭さん。作者本人の口から聞く作品への想いやエピソードに、参加者も大いに納得していました。

トークセッションの最後は、電子書籍についての話題に。桜庭さん曰く「電子書籍は映画と似ている」とのこと。「私自身、大の映画好きなのですが、好きな作品はどんなに大きなスクリーンで見ても、小さな画面で見ても、作品に対する『好き』という気持ちは変わりません。本も同じではないでしょうか」（桜庭さん）

また、「紙や電子書籍など、メディアによって段組みやデザインが変わってしまうことは課題ですが、作品への感想や思いは誰がどのような手段で作品を味わったとしても変わることはないと思います。今後、読書という行為にメディアが問われることはなくなってくる」と話し、会を締めくくりました。

帰り際には、参加者一人ひとりに丁寧なサインと、桜庭さんが用意されたクッキーを手渡すサプライズもあり、参加者だけでなく関係者一同が感激した読書会となりました。

